
プロジェクト報告

南米ラクダ科動物の毛色分類： 民俗名称調査の報告

鳥 塚 あ ゆ ち

1. はじめに

本稿は、ペルー共和国クスコ（Cusco）県に位置するワイリャワイリャ（Huaylla Huaylla）共同体において実施した南米ラクダ科動物（リャマ、アルパカ）の毛色の民俗名称調査に関する報告である¹⁾。

ペルーでは1960年代以降、国際市場の需要に合わせて、とりわけアルパカの品質改良が推進されてきた。ここで言う「品質改良」とは、獣毛の品質の改善のみならず白色単色化を意味していた。その理由が染色の容易さにあることは言うまでもないが、背景にはアルパカ毛の商品化と輸出の拡大という政府の意向が存在した（Bolton 2006；Flores Ochoa 1988；稲村 1995：99-100）。1990年代に入るとラクダ科動物の品質改良は家畜を飼養する先住民の共同体にも及び、アルパカ白色毛の市場価格上昇とともに群れの白色化（blanqueamiento）が徐々に進行していった。

他方で、ペルー国内全体を見ても個々の共同体においても、有色個体の減少や色の多様性の喪失という弊害が生じた。この白色への偏向に対し、前世紀の終わり頃から有色個体を回復させようという動きも出てきた。政府や国際機関が主導したプロジェクトでは、アンデスにおける生物多様性の保護と遺伝子保存、持続可能な家畜管理、生産者の生活改善・貧困の解消などが目標に掲げられ、とくに個体数の減少が顕著だった黒色やスリ（*suri*）²⁾を中心に個体数の増加が図られた。特筆すべきは、先住民共同体に品質改

1) 本研究は「青山学院大学人を対象とする研究に関する倫理規則」の審査を受けて実施されたものである。本稿の一部は、2025年7月に開催されたアンデス・アマゾン学会第14回研究大会で報告した。

2) アルパカの品種のひとつで、長く繊細な毛がその特徴である。もう一つの品種はワカヤ

良のための技術支援が導入され始めたのと同時期の90年代に、有色個体回復の試みが一部地域で開始されていたという点である。ここに、ペルー社会における先住民共同体の周縁的位置づけが見てとれるだろう。以上のようなアルパカの品質改良、換言すれば「白色化」と有色個体の回復の経緯については、すでに拙稿で述べた（鳥塚 2025）。

本稿で問題にするのは、リヤマ・アルパカの毛色に対する認識の差異である。家畜の改良が進むと、調査地の人々は品評会に自身の家畜を出展するようになり、地域の改良推進者との交流を通じてさらに改良活動に邁進していった。この品評会（*feria de camélidos sudamericanos*）では、種・品種・性別・年齢といったカテゴリーに分類された家畜の品質を専門家が評価していくのだが、リヤマの体毛の品質が重視されないのに対し、アルパカではその繊維の質と色が念入りに調べられる。上記の分類基準に加えて白色（*blanco*）と有色（*color*）に分類され、単色の個体が良質とされる一方、白色に他の色が混じる混色は改良不足とみなされ評価の対象から外れる。この際、体毛には白のほか黒・灰・茶など明確に分類できる色の区別があるにもかかわらず、「有色」カテゴリーのなかの色の違いは重要視されない。品評される有色個体数の少なさがその要因のひとつではあるものの、市場との関連から品質改良が進められた経緯を考えると、有色毛の市場価値の低さも大きな要因になっていると考えられる。つまり、より改良を促進したいのは、市場価値の高い白色なのである。この品評会への参加が群れの白色化に拍車をかけたことに疑問の余地はない。

筆者の調査では、牧民共同体においても有色個体が失われていくにしたがい、人々は眼前にない色の名称をすぐに思い出せないという事態に陥っていた。たしかに、生物学的多様性保護の観点から個体自体を回復させることは重要である。しかし、色に関する民俗名称を採録し記録しておくことも、歴史・文化的観点から十分に意味のあることだと言えよう。以下、本稿では2023～2024年にワイリャワイリャ共同体で実施したリヤマ・アルパカの毛色名称調査の結果を示す。また、家畜の品質改良活動開始から30年ほど経過するなかで、人々が「白色化」をどのように評価しているのかについても、若干の考察を加えることとする。

2. 調査の概要

調査対象としたワイリャワイリャ共同体は、クスコ県チュンビビルカス（Chumbivilcas）郡に属する。領域の標高は約4,300～4,900mであり、農耕を行うことが

（*huacaya*）と呼ばれる短毛種である。

困難なため人々は牧畜に専従している。主要な飼養家畜はリャマ、アルパカ、ヒツジ、ウシ、ウマであり、ヤギやロバといった他地域で飼育される家畜はほほいない³⁾。

当該共同体におけるフィールドワークは、2004年6月の予備調査を経て同年8月から開始し、2025年まで断続的に実施してきた。調査は、成員の住居に住み込んで参与観察と聞き取りを中心に行う文化人類学的手法で行っている。

本稿のテーマに関連する毛色の民俗名称調査は2023年から3期にわたって実施し、いずれも共同体成員を対象に聞き取りを行った。2023年8月に7名、2024年3月に1名、同年8月に2名、計10名から名称を採録することができた。なお、リャマでもアルパカでも基本的に色の名称は同じだが、模様についてはどちらかに出やすいものがあるとのことで、なかには同じ模様で異なる名称で呼ばれるものもあった。模様分類についても調査を行ったが、その結果については未整理で追加調査も必要なため別稿に譲る。

3. リャマ・アルパカ毛色の民俗名称

先に述べたように南米ラクダ科動物の品評会では、アルパカは「白色」と「有色」の2カテゴリーに分類される。リャマの毛はアルパカほどの品質はないと考えられており、衣服などの原料には適さず、荷袋やロープの材料として用いられてきた。荷袋などでも色で模様をつけてはいるが、わざわざ染色することはなく、色が混じることがあってもとくに価値を下げるようなことはない。他方で、セーターやマフラー、ショールなどの衣服に用いられるアルパカ毛は、年ごとに流行の影響を受けて染色されるため、白色単色の価値は高い。

一般的に、市場で売買されるアルパカ毛は繊維企業が染色を担う。染色された紡糸は同じ企業で製品に加工されることもあれば、中・小規模の企業や個人の服飾・工芸品製作者向けに販売されることもある。このために毎年カラーカード（色見本）が作成される。繊維企業では、記号によって毛色が分類され、たとえば天然色の白は「100B」、黒は「500N」など、数字とアルファベットで区別されるのが一般的である。アルファベットの「B」はスペイン語で blanco（白）、「N」は negro（黒）の頭文字を表していると思われる。有名な繊維企業のひとつである Michell の2023-24年の機械織り用紡糸のカラーカードには、白と黒のほか、天然色の茶・灰、それらに白を混ぜた混色が並ぶ。染色した毛には黄・緑・青・紫・赤などの色のバリエーションがある。染色後の毛には、黄色なら「AM」、青なら「AZ」のあとに数字が振られている。「AM」はスペイン語の

3) 共同体の詳細については、鳥塚 2025を参照されたい。

amarillo (黄)、「AZ」は azul (青) の意味だろう。数字は、色の濃淡やグラデーションなど染色過程で便宜的につけられたもののようで、規則性は読みとれない。

牧民による家畜の毛色分類は、企業によるものとは異なる。現在は、品質改良や品評会などの影響を受け、スペイン語の名称や LF (淡黄色、Light Fawn) のような名称を用いることも増えたが、筆者の調査地では伝統的にはケチュア語による名称が使用されてきた。この民俗名称に関する詳細な研究は、管見の限りフローレス・オチョア (1981) によるものが唯一の記録である⁴⁾。表 1 はフローレス・オチョアによる分類を基に、筆者が作成した。

この分類を参照すると、色階は白 (*yuraq*)、黒 (*yana*)、色 (*kulur*、color) の 3 つに分けられ、基本色として淡黄白色 (*mapha*) からコーヒー色 (*chumpi*) まで 7 つに分類されている⁵⁾。その下位分類の色調は 19 色が数えられる。色のバリエーションについては 22 色と述べている研究者もあり (Enríquez Salas 2003 : 22, Mamani Machaca y Aragón Merma 2016 : 31)、複数の色の組み合わせや斑の位置などから区別される模様パターンは 36 種に及ぶと論じられている (Flores Ochoa 1981)。

4) たとえば、ビラもアルパカの分類について言及しているが (Vilá 2014)、独自の調査による分類ではなくフローレス・オチョアによるものを引用している。

5) 以下、ケチュア語の名称は斜体で表記する。

表 1 フローレス・オチャアによる毛色分類

色階	基本色	色調
白 (<i>yuraq</i> -blanco)		星 (<i>qoyllu</i>)
		白 (<i>yuraq</i>)
色 (<i>kulur</i> -color)	淡黄白色 (<i>mapha</i> -blanco crema)	淡黄白色と淡黄色の間 (<i>wayra mapha</i>)
	淡黄色 (<i>wayra</i> -crema)	
	栗色 (<i>khurusa</i> -castaño)	白栗 (<i>yuraq khurusa</i>)
		赤栗 (<i>puka khurusa</i>)
		グアナコ (<i>wanaku</i> (?))
	灰色 (<i>oqhe</i> -plomo)	白灰 (<i>yuraq oqhe</i>)
		青灰 ('asul' <i>oqhe</i>)
		黒灰 (<i>yana oqhe</i>)
	煙草色 (<i>wik'uña</i> -tabaco)	茶煙草 (<i>paqo wik'uña</i>)
	茶色 (<i>paqo</i> -marrón)	白茶 (<i>qoyllu paqo</i>)
		(<i>choqe paqo</i>)
		黒茶 (<i>yana paqo</i>)
	コーヒー色 (<i>chumpi</i> -café)	(<i>k'iska chumpi</i>)
		真茶／真コーヒー (<i>chawpi chumpi</i>)
		赤茶／赤コーヒー (<i>puka chumpi</i>)
		黒茶／黒コーヒー (<i>yana chumpi</i>)
黒 (<i>yana</i> -negro)		赤黒 (<i>puka yana</i>)
		(<i>ch'illu</i>)

(Flores Ochoa 1981: 204 表 5 を基に筆者作成)

注) フローレス・オチャアの記述とケチュア語辞書から訳出できるものは日本語に訳出している。

表 2 ワイリャワイリャでの聞き取り調査による毛色分類

ケチュア語	スペイン語	日本語
<i>yuraq</i>	blanco	白
<i>wicuña paqo</i>	LF	淡黄
<i>q'ello</i>	amarillo	黄、淡黄
<i>khurusa</i>	medio castaño	栗
<i>oqhe</i>	plomo/gris	灰
<i>paqo/ñaku</i>	color vicuña	茶 ビクーニャ 薄茶 茶 コーヒー 濃茶
<i>mosq'o</i>	medio café/café claro	
<i>chumpi</i>	castaño	
<i>puka chumpi</i>	café/caboa	
<i>yawar chumpi</i>	café oscuro	
<i>yana</i>	negro	黒

ワイリャワイリャでの聞き取りから明らかになった毛色名は11であった (表 2 参照)。対照すると、表 1 の「基本色」とおおむね同じであることがわかる。これに、「明るい／暗い」といった色調を加えると、22色ほどあるとのことだった。

フローレス・オチャによる分類と異なるのは、野生のラクダ科動物であるビクーニャに似た色を表すのに、ワイリャワイリャでは「*paqo*」や「*ñaku*」の名称を使用しているが、表1でその名称は「*paqo wik'uña*」と表される点である。ワイリャワイリャではその名称に対応するケチュア語は「*wicuña paqo*」となるが、この色はスペイン語で「LF」と回答している。すでに述べたようにこのLFは淡黄色のことで、ビクーニャの体色よりも薄い、白に近いクリーム色を指す単語である。国際市場では白色と並ぶ高い価格で取引される色として知られており、それゆえ牧民もこのLFという名称を使用するようになったと考えられる。現在、淡黄色を指して「*wicuña paqo*」と呼ぶことはほぼない。茶色のバリエーションは豊富で、表1でも最も色調の種類が多い。ワイリャワイリャでは「*mosq'o*」や「*chumpi*」がそれに当たる。

興味深いのは「*q'ello*」という名称である（表2）。これは一般的には「黄色」を示すケチュア語だが、辞書には「黄金色」や「淡い黄色」という説明も掲載されている。筆者は「黄色」を意味するケチュア語と認識していたため、聞き取り時には近くにあった黄色いビニール袋を指して「*q'ello*はその色ではないのか」と確認したところ、「その色も*q'ello*だしアルパカの色も*q'ello*と言う」とのことだった。*q'ello*のアルパカが付近にいなかったのではどのような色か説明を求めたところ、「少し黄色で少しオレンジのような明るい毛」と回答された。なかには「LFのような色」と言う者もいた。

日常的に他では聞かない色名称としては「*khurusa*」が挙げられる。フローレス・オチャの聞き取りでも同名称が採録されており、栗色（*castaño*）との説明がある。ワイリャワイリャの成員によると、「単色でなく茶に白が混じっている色」とのことであり、実際の家畜の体色も白みがかかった茶色だった。目の前にこの色の家畜がいない場合、説明はやや難しいようで、「どう説明したらいいのか」と悩みながら、付近の物の色を探して「ちょうどこのシャツのような *violeta*（すみれ）のような色」と説明する者もいた。2025年の調査時に、群れの中に一言で表すのが難しい体色のアルパカがいたため聞いたところ、*khurusa* だという。筆者の主観では、灰色と薄紫色の間くらいの色だった。単色ではなく多色が混じるため、光の反射も相俟って説明し難い色となる。先の薄茶色の毛も同名で呼んでいたため、さらに混乱する。この *khurusa* と灰色の個体は、顔のみ白色をしているという特徴もある。

4. 牧民共同体における有色個体回復の現状と白色化への評価

国際市場においてアルパカ白色毛が好まれる傾向は、多様性が重視されるようになった現在においても大きく変化していないように思われる。ペルーのクスコ県でも、行政

付属のラクダ科動物関連機関ではアルパカ個体の白色化を継続して推進している。2009年にタクナ（Tacna）県の151家族、約17,000頭のアルパカを対象に行われた調査の報告でも、成獣・幼獣、オス・メスすべてのカテゴリーにおいて白色が優勢だったと述べられている（Chaparro Aguilar 2010）。全体の割合は、白色が約61%、有色（単色）が約25%、混色が約14%という結果だった。

ワイリャワイリャ共同体では、筆者が調査を開始した頃に比べると、様々な要因により全体的に品質改良そのものが減退しているように感じられるが、現在でも改良活動を細々と続けている者もいる。彼らの多くは白色単色毛をもつ個体への改良を個々に継続しており、当該共同体に拙稿（鳥塚 2025）で述べたような有色個体回復のためのプロジェクトは導入されていない。他地域で有色回復のためのプロジェクトが実施されているとは知らなかったと話すがいる一方で、品評会で天然色のアルパカ毛を求める人がいるのを見て有色個体を増やしたと答える牧民 A のような人もいる。アルパカ毛は牧民の主要な現金収入源だったことから⁶⁾、色による市場価格の差異は群れの白色化を推し進めてきた。これまで、獣毛の主な販売先である仲買人や繊維企業が有色毛を高く買い取ってくれない、と多くの牧民から聞いた。たとえば企業に売る場合、有色は白色の半額程度にしかないと言う⁷⁾。価格の幅は市場の需要によって多少変化するとはいえ、白色と有色で少くない差異が存在するのは今でも同様である。現状、有色個体を増やすより白色を飼うほうが現金収入は維持できると言えるが、それでも有色を増やす理由は何だろうか。

A 氏は、有色毛は工芸品製作用として知人に販売しているという。「色は白より安いのが1〜2ソーレスくらい安いだけ」と言い、企業に販売するより、わずかであっても利益が出ると考えている。また、品評会でクスコ県オコンガテ（Ocongate）の工芸品製作者が1ポンド40ソーレスで灰色のアルパカ毛を買ったのを見て、有色もいずれ価値が出るかもしれないと思い少しずつ増やしているとも語った。彼は改良技術導入後に活動を先行していた人物で、2004年頃には他の成員の群れと比べて「私のアルパカは白い」と筆者に自慢していた。ところが、2022年には隣人の群れを指して、「彼らはまだ白いアルパカを飼っている」と言い、白色個体のみを飼養することが時代遅れであるかのような態度を示した。

6) 近年では都市化や道路網整備の影響から町に居住する者も増え、現金収入源も多様化してきている。

7) Michell の買い取り価格の平均は、1ポンド当たり白色で12ソーレス（約480円）、有色単色毛で8〜9ソーレス（約350円）、多色のものは4.5〜5ソーレス（約200円）とのことである。1ソルは約40円。

初めに述べたように、ワイリャワイリャ共同体では家畜の品質改良が開始されてから約30年が経過した。共同体のなかでも改良の進捗度は異なり、A氏のように当初から積極的に進めてきた者もいれば、資金がないなどの理由から消極的な者もいた。また、質のよい個体にするには生殖管理が欠かせないが、それが継続できない成員も少なからず存在した。群れを白色にすることに對してどのように考えていたのかを成員に聞いたところ、「白のほうが高く売れるから白にしたし、そうしかった」と答えた者が多かった。A氏も無論、同じ理由で白色化を望んだ。しかし、「以前から有色も所有していた」と答え、「白ばかりより色がいる方がいい」と現在の自身の群れを評価した。このような説明は以前には聞かれなかったことであり、時代の変化に合わせて家畜の飼いやそれに対する理由付けを柔軟に変える牧民の姿勢が表れている。有色個体回復の動きを知らなかったと答えた別の牧民も、有色が必要になったら隣人から購入したり種オスを借りたりして増やすだけ、と筆者に語った。

改良に後れをとっていた成員のなかには、「改良はあまりしなかった。白だけより色がよかったから。儲かるというだけで白だけ飼いたいとは思わなかった。群れにいろんな色がある方が好き。でも、すべての色は持っていない」と話す者や、自身のかつての群れを思い出して「美しい色がたくさんあった。群れにはいつも色（の個体）がいた」と言う成員もいた。彼らの意見からは、必ずしも全ての成員が利益を優先して白色化への改良を進めたわけではなかったことが窺える。しかしそのような者でも、「白の方が（毛の）値段が高いから白にした。色はいたけど毛の質は低かった」と、白色化へ転換した契機を振り返った。

5. おわりに

本稿では、ペルー、クスコ県の牧民共同体における南米ラクダ科動物の毛色に関する民俗名称調査の結果を示した。聞き取りの結果、約10色の名称が明らかとなり、その一部はフローレス・オチョアが示した名称と同じものであった。色調に関しては、たとえば「白」を2区分している点などフローレス・オチョアが採録したものの方がよりバリエーションが豊かである。とはいえ、基本色の名称に大きな違いはないように思える。

表1では白色から黒色へと色調が並べられており、表2もそれにしたがって作成した⁸⁾。*khurusa* という色は、白に近い茶色を表す場合はクリーム色と訳せるような

8) フローレス・オチョアの表では左に白色、右に黒色と並べられているが、表1を作成するにあたり順序は入れ替えていない。

mapha や *wayra* に類似した色で、ワイリャワイリャではこのクリーム色を *q'ello* と呼んでいることがわかった。ただし、この *khurusa* という色が茶系統のみならず灰色に近い多色も表すことは非常に興味深い。異なる系統と思われる色を一語で表す単語は、スペイン語にも日本語にもないのではないか。このような天然の混色は、複数の個体で同一の色が出にくいと考えられるため、希少性や個別性からその価値が認められてもよさそうである。しかしながら、画一的な色を求める市場では価値が付与されなかった。その結果、このような有色個体の頭数は減少してしまったのである。

牧民共同体では一部で有色個体回復の動きがあることが確認でき、白色単色化から多色化へのより戻しの可能性が示唆される。有色個体を増やす動機としては、市場での価格上昇を見越してという経済的理由が主たる要因であったとしても、それがすべてではない。聞き取りでは、「元々いろんな色を飼っていたから」という理由も聞かれた。このような慣習、あるいは多色を好む志向が人々のなかに存在するののもまた事実である。ここに、毛刈りをした後の「繊維」を求める市場と、動物の生に直接関わり、日々群れと向き合う牧民との間の相違を読み取ることができるだろう。

本テーマに関する現地調査を開始した2022年には、有色回復はゆっくり進行するのではないかと想定していたが、有色個体の購入による（再）導入で群れの色構成が早く変化することもあり得る。共同体全体の傾向を知るには、今後の追加調査が必要となる。また、地域全体の動向を探るには品評会での調査が有効だろう。これについても次回調査の課題としたい。

謝辞

本稿は2024年度国際研究センタープロジェクト補助金、JSPS 科研費 JP20K01204、21H00647の助成を受けて行った研究の成果を含むものです。調査はワイリャワイリャ共同体の皆さん、ラクダ科動物品質改良に従事する技術者、および繊維企業と工芸品製作者のご協力により実施できました。ここに記して感謝申し上げます。

参考文献

- Bolton, Maggie (2006) Genetic defects or generative prototypes?: Competing models for livestock improvement in south Bolivia, *Journal of the Royal Anthropological Institute* 12 (3): 531-549.
- Chaparro Aguilar, Chela (2010) *Estudio de la diversidad de alpacas de color (Vicugna pacos) de la raza huacaya en unidades pecuarias familiares en la provincia de Candarave-Región Tacna-2009*. Tesis de Bachillerato de la Universidad Nacional Jorge Basadre Grohmann, Tacna.
- Enríquez Salas, Porfirio (2003) La alpaca suri de colores naturales: ¿Una raza en proceso de extinción?, *Leisa Revista de Agroecología* 19 (3): 22-25.
- Flores Ochoa, Jorge A. (1981) Clasificación y nominación de camélidos sudamericanos, En *La*

- tecnología en el mundo andino*, Heather Lechtman y Ana María Soldi (eds.), Tomo1, Serie Antropológica 36, pp.195-215, Universidad Nacional Autónoma de México, México.
- Flores Ochoa, Jorge A. (1988) Cambios en la puna, En *Llamichos y paqocheros: Pastores de llamas y alpacas*, Jorge A. Flores Ochoa (ed.), pp.273-293, Centro de Estudios Andinos Cuzco, Cuzco.
- 稲村哲也 (1995) 『リャマとアルパカ：アンデスの先住民社会と牧畜文化』、花伝社。
- Mamani Machaca, Leoncio y Oscar Aragón Merma (2016) Reproduciendo alpacas de color en comunidades campesinas, *Leisa Revista de Agroecología* 32 (4) : 28-31.
- 鳥塚あゆち (2025) 「ペルーにおけるアルパカの白色化と有色個体の回復」、『Aoyama Journal of International Studies』 (12) : 113-121。DOI: <https://doi.org/10.34321/TF02032788>.
- Vilá, Bibiana (2014) Una aproximación a la etnozoología de los camélidos andinos, *Etnoecológica* 10 (5) : 2-16 (PDF Provisional).